

マジックを取り入れた保育実践に関する一考察

—保育実習指導でのレクチャーを通して—

伊藤 亮

愛知学泉大学

Consideration about Nurture Practice to which Magic was introduced

—Through a lecture by nurture laboratory work—

Ryo Ito

キーワード：保育実習指導 Nurture laboratory work, 保育実践 Nurture Practice, マジック（手品） Magic

1. はじめに

本論の目的は、保育実習生がマジックを実践することによって、こども達との関わりにどのような効果があるのかを検討することである。保育実習生は部分実習や責任実習、研究保育に対してパネルシアターやペープサートといった児童文化財、レクリエーション等のアイディアを考え、実践しようとする。しかしながら、古くから用いられてきた児童文化財やレクリエーションはこども達にとっては既知のものであり、思ったような反応を引き出せないこと、せっかく計画してきたのに指導保育者からはありふれているので別のものにしてほしい、といった指導を受けることも少なくないようである。結果として、保育実習生の保育に対する自己効力感は低下し、中には「あんなに考えたのにダメ出しをされた。自身は保育の道に向いていない」と保育への道を断念してしまう者もいる。

保育者不足が叫ばれ、さらに保育者の質を求められる昨今であるからこそ、保育に対する熱意、自己効力感を持った学生を保育の現場に送り出していくことが保育者養成校に求められる使命であるといえよう。そこで、保育現場で人気が高いが、実践者が少ないマジックを学生に身に着けさせることで、保育やこどもに対する思いがどのように変化するかを検討することとした。

2. 問題と目的

(1) 日本におけるマジックの変遷と大衆化

マジックとは「娯楽性を伴った芸術表現である」（ハー

ラン・ターベル¹⁾）。しかし、「エンターテイナー達、ナイトクラブや舞台の合間で活躍する芸人の登場するような場も、価値観の多様化と共に失われてしまいました。マジックという芸能に関していえば、大劇場の公演、キャバレーやナイトクラブでのショーは衰退し、テレビを主体としたメディアでの出演、バーやレストランでの酔客相手の余興といった形にシフトしていき、よりお手軽に、より簡単なものが受け入れられるようになってしまいました」（カズ・カタヤマ²⁾）。また、カズ・カタヤマは「パーティーの余興の舞台や店舗の片隅の小さなカラオケのステージがせめてのお情けで続けられているような現状です」と述べ、「まさに真の意味での舞台奇術は死滅した」と指摘している²⁾。

確かに、カズ・カタヤマが指摘するように芸術表現としてのマジックは発表の場面が少なくなり、一方でマス・メディア等の台頭によってマジックは大衆に広く触れられるものとなったといえよう。しかし、それは同時に様々な人に対してマジックが身近になったともいえないだろうか。例えば、ショーアップされたキャバレーやナイトクラブやといった場では、芸術表現としてのマジックは実践されるかもしれないが、こどもという低年齢の者がマジックに触れることは難しいだろう。だが、マジックの大衆化によってこどももマジックという不思議に触れられる機会が増えたのも事実である。テレビでのマジック特番の構成については個人的に思うところはあるものの、マジックが身近になったことによって、こども達の遊びや想像力、好奇心を刺激する機会が増えたことは喜ぶべきことではないだろうか。

(2) マジックと保育の関係性

ところで、保育とマジックとは親和性が高い。ある調査では、96%の園児が「マジックを見ることが好き」と答え、その理由として「おもしろいから・楽しいから」と答えたという報告もある³⁾。保育者を対象としたマジックの教本は数多く出版されており^{3)~9)}、保育雑誌の連載としてマジックが取り上げられてきたこともある³⁾。また、誕生日会や発表会などでの出し物のレパートリーをまとめた「カンタン！すぐできる！アイディアたっぷり出し物BOOK」や「出し物たっぷりネタ帳 1・2」でも、「こどもたちに大人気」と見出しがつけられ、1つの章として取り上げられている^{10)~12)}。マジックはタネも仕掛けもあるものであるが、観る者の現実原則を覆し、不思議さをもたらす行為である。こども達は「普通では起こりえないこと、違うこと」を目にすることによって、世界の不思議に対して好奇心を持ち、自らも実践しようと真似をしたり、遊びの中で取り入れることで想像力を発達させていく。また、マジックとは「コミュニケーションの道具」でもある（マジックテインメント・テンヨーの理念）。その言葉通り、マジックを通して保育者やこども同士のコミュニケーションが促進されることも多い。最近では、保育の研修会でマジックの講習が行われることもあるなど、保育者もこれまでのパネルシアターといった児童文化財以上にこども達の育ちに刺激となるアイディアを求められていることが伺える。

筆者の実践からのことであるが、筆者は大学生時から奇術研究会に所属し、今日に至るまで15年以上のマジック実践を行ってきた。アマチュアマジシャンとして、当初は芸術表現としてのマジックの実践を目指し、「人形」という手順を発表した。2008年には韓国ロッテワールド第6回マジック・コンベンションにおいてアレキサンダー・アワード（特別賞）を受賞したという経歴を持つ。一方、保育園や子ども会、発達障害児の会でのボランティアマジック公演を数多く実践してきた。保育園や子ども会でのマジック公演は「お誕生日会」、「お楽しみ会」のメイン・イベントとして位置づけられ、こども達はキラキラとした目で、歓声を上げマジックを楽しんでいた。後日、園長先生や担任保育者から「その日の午後は、みんながマジックごっこでした」と教えてもらうことも多く、マジックという実践がこども達の「感性」に響いたのだと実感することができる。また富田¹³⁾は、こどもが「不思議」を楽しめるようになる発達的变化について検討を行っており、手品を用いた実験によって、手品の「不思議」性を楽しめるようになるのは年中以降になってからということを示している。

筆者の経験および富田¹³⁾の報告からすれば、マジックがこどもの感性の発達や人間関係の展開に有効であるのは大いに期待ができることである。糸¹⁴⁾は、保育実践において、こどもの興味関心をひきつけ、創造性を育むものとしてのマジックの効果について報告している。また、保育の主活動の導入としてマジックを活用することで主活動への集中力へとつながること、こどもが家庭でマジックを観たことを話すことで家庭での会話が展開するといった効果を報告している。しかしながら、保育とマジックに関しては糸¹⁴⁾以外の報告はない。保育実習生がマジックを取り入れることで得られるこども達との関わりの効果について検討した研究は皆無である。

(3) 保育実習生と保育実習指導の現状

保育所保育指針に示されているように、保育の目標の一つとして保育の原理には、「様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと」¹⁵⁾がある。また、人間関係の内容として「安心できる保育士等との関係の下で、身近な大人や友達に関心を持ち、模倣して遊んだり、親しみを持って自ら関わろうとする」¹⁵⁾ことが示されている。このような目標に対して、こども達がマジックという刺激を通して、豊かな感性や表現力、創造力を獲得していくことに寄与できるのではないだろうか。

上述した目標を達成するために、保育の場では絵本、ペープサートやパネルシアター、エプロンシアターといった代表的な児童文化財の実践が受け継がれてきており、これらの児童文化財を用いた保育実践がこどもの感性や創造力を育んでいることは重要な事実である。保育実践が「こどもを楽しませる」という前提の目標がある。児童文化財を初めて観るときはストーリー展開のワクワク感を与えてくれるであろうし、繰り返し観ることで物語性を自身の内に取り込み、そのイメージを基盤としてこども自身の新たな「遊び」の展開につながっていくものである。

このような背景から、保育者養成校では児童文化財を授業として教え、保育実習生はいくつかのネタを学び、保育実習の場へと赴いていく。こどもを楽しませる、一緒に楽しみを共有する活動は児童文化財の実践だけでなく、鬼ごっこやフルーツバスケットといったルールのあるゲームをする、一緒に身体を動かす、お話をする、と様々である。学生たちは自身の感性やパーソナリティにあった題材を見つけ、「持ちネタ」として保育実習に臨んでいく。

しかし、現実には甘くない。養成校で学んだ児童文化財は保育の場で繰り返し実践されてきたものが多い。学んだことを部分実習や責任実習で指導案として提案しても保育

者達から「いつもやっている絵本や手遊び、ゲームばかりなので、もっと他に子ども達を楽しませるものを取り上げてほしい」という言葉を返されることも少なくないようである。また、子ども達からは「観たことある」「他のないの?」といったような保育実習生には厳しい言葉を投げかけてくることもある。そのため、少なくない保育実習生が実習直前や実習期間中に慌てて新しいネタを探したりすることになる。しかし、このようなにわか仕込みのネタは保育実習生が考え込み、練り上げたものではないため、往々にして保育の「ねらい」が曖昧であったり、うまくいかなかったりと、多くの課題点をもたらす。

勿論、課題点に多く出会うことが実習の一つの目的であり、課題点を一つ一つ内省し、改善していく姿勢があつてこそ、保育実習生は保育者へと成長していくのである。しかしながら、実習での失敗体験は保育実習生の自信を低下させる。思ったような反応が子どもから得られなかったことに落ち込む、手遊びやピアノのレパートリーの少なさ、保育者からの「ちょっと何か一つやってくれないかしら?」といった急なフリに対応できず、不全感を抱えてしまう。結果として、「思い描いていた保育の在り方」とのギャップを感じ、志していたはずの保育の道を断念してしまうおそれもある。

では、保育者養成校の保育実習指導とはいかなるものであることが望ましいのだろうか。当然、実習に関する諸注意を伝えることは必要であり、挨拶やマナー、提出物の期限を守るといったことの指導は必要であろう。しかしながら、そのような指導に終始していて、保育実習生は満足なのであるか。保育実習生はまだまだ未成熟である。部分実習はおろか、朝の会や給食前の「ちょっとした時間」の小ネタであっても満足に獲得できてはいない。インターネットが発達している現代であれば、検索すればすぐにでも数分場をつなぐ小ネタを見つけることは難しくはないだろう。しかし、保育実習生にはその小ネタを「使える」という確信を持つことが難しいようにも見受けられる。また、それ以前に「保育で使えるネタ」の探し方がわからないまま、実習を迎える者も少なくない。探したとしても、習得できるのか、使えるのか、ウケるのか...様々な猜疑心の渦に巻き込まれ、保育実習生はネタを仕入れることを止めてしまうのである。過保護であるかもしれないが、このような状況を容認し、自身で修行的に実践できるアイデアを探してくるようにと伝えることは、保育実習生には些か酷というものであろう。であればこそ、理論と実践に裏打ちされたネタをライブで紹介し、レクチャーを行うことで、保育実習生が「できる」という感触を得ていけるような授

業を提供していくことが保育実習指導の一つの目標として望ましいものとなるのではないだろうか。

以上の問題意識から、本論ではこどもと楽しみを共有し、感性や創造力、コミュニケーションを促進させるために、保育実習指導においてマジックのレクチャーを実践し、それを学生が保育実習・教育実習において実践することによってどのような効果があるかを検討することとした。

なお、レクチャーするマジックの選定に関しては様々な書籍が出版されており、誕生日会や発表会などイベントに合わせた内容を取り上げることも可能であった。しかし、本学の保育実習は2月、教育実習は5月から6月にかけてと比較的イベントが少ない時期に設定されている。よって、イベント等とは特に関連せず、日常生活の中で身近にある素材を使ったマジックを選定することとした。また、学生の習得の負担を考慮し、無数にあるネタの中でも比較的簡易に習得できるものを選定することとした。

3. 方法

保育実習指導（2年生後期、3年生後期）において筆者が実践している「ハンド（パントマイムの一種で指の運動というオリエンテーションで実施している）、切れる親指」、「かんたんクイック手品を100倍楽しむ本」⁴⁾より「おじぎハンカチ」、「お花を咲かせよう」、「ちぎってもだいじょうぶ?」、「おり紙マジックワンダーランド」¹⁶⁾より「プレゼントボックス」、「奇術入門シリーズ テーブルマジック」¹⁷⁾より「安全ピンとハンカチ」、「マジックのネタ帳」¹¹⁾より「おりこうな水」を2回の授業を使ってレクチャーを行った。

なお、筆者は前述したとおり15年以上アマチュアマジシャンとして活動している。また、海外のマジック・コンベンションでの受賞歴に加えて、国際的なマジック団体である International Brotherhood of Magician (IBM) Nagoya Ring の会長を務めており、マジック・レクチャーに関しては十分な経歴を持っていると自負している。

レクチャーでは、本に忠実に従ったオリエンテーションで行ったものと、筆者がアレンジを加えたものも両方を実施した。上記マジックに関しては、筆者が実際に模範演技を行い、その後学生に実践するという方法で行った。なお、学生の実践については習得が難しい学生に対しては筆者が個々に指導を行った。

実習を終えて進級した3年生、4年生に対して「マジック実践を行ったか」、「行った場合のこどもの反応」、「その後のこどもとの関わりの変化」、「やってみての気持ちの変

化、保育やこどもとの関わりのへの思い」「今後、取り上げてほしいマジックは？」について自由記述式の質問紙調査を行った。同時に「マジック実践を行わなかった場合の理由」についても自由記述で回答を求めた。対象は1度目の保育所実習を終えた3年生67名と、2度目の保育所実習および教育実習を終えた4年生67名（計134名）に対して2017年6月に質問紙調査を実施した。

4. 結果

質問紙調査の結果、保育実習・教育実習でマジックの実践を行った者は21名であり、全体の15.6%であった。以下は、実践を行った者の内、各質問項目についての自由記述の一部を学生の言葉そのままに乗せたものである。

(1)「実際にやってみてこどもの反応はどうだったか？」

- ・「なんで？」「すごい」と不思議そうに楽しんでいた。
- ・興味をすごく持った。もう一回とすごく迫られた。
- ・とても喜んでくれた。「もう一回やってー」などと言われた。
- ・尊敬の眼差しで見られた。
- ・とてもよかった。興味を引けたと思いました。
スカーフのマジックをやったとき、みんな自分のハンカチから必死になってだそうとした。トランプのマジックでは部屋にあるトランプで真似をする姿が見られた。
- ・びっくりしていました！もう一回や、他にもという声がしましたよ。
- ・新聞紙のマジックをやりました。不思議そうに「なんで〜？」と言われ、「あれやって〜」と言われ実習中に3回もやりました。
- ・驚いていて、もう一回やってほしいといわれました。
また、真似をしてこども達も挑戦してくれました。
- (2)「マジックをやったことで、こども達からの関わりはどう変化したか？」
- ・何回もやっていた。見せ合いっこしていた。

- ・やってやって、と関わってきた。あまり関われなかった子が向こうから寄ってきてくれた。対話が増え、笑顔がよく見れるようになった。
- ・もう一回、や他のは？と言われ、他のマジックを個別に教えたなら、他の子どもに見せ始めました。
- ・こどもとの対話が増えた。こどもに教えた。
- ・「もう一回やって」といわれたり、ママに見せるから教えて、といわれたりしました。
- ・もう一回やっては多かったです。関りの少ない子も話しかけてくれました。
- ・こども達とコミュニケーションをとる機会が増えました。
- ・心の距離が近づき、自分の周りに寄ってくる子が倍以上に増え、関りが多くなった。
- ・一人あまり話をせず、一線引いてしまった子がいたのですがマジックをしてからよく話すようになった。
- ・人見知りの子も近くで見てくれたり真似したりしてくれました。
- (3)「実践してみて、自分の保育やこどもに対する気持ちに何か変化はあったか？」
- ・導入としてやりましたが、興味を引くことができました。とても良い方法だと思いました。
- ・これからも活用していきたいと感じた。
- ・最初にこどもの心をつかむのに有効だと感じました。また、休み時間にやるのが同じになってしまっているときにやると、こどももとても楽しそうにする（目がキラキラってかんじです）
- ・こども達を楽しませることができてうれしかったです。こんなことでも喜んでくれるんだと思った。もっと笑わせたいと思った。

- ・こどもの反応がとても心地よかった。
- ・こどもの注目が集めれてよかった。
- ・やってみて盛り上がり楽しかった。もっとやってあげたいと思った。
- ・子どもの方から関わってくれると保育がしやすくなった。保育が楽しいなと思えた。
- ・こどもが驚いてくれることで嬉しく感じた。もっとこどもと関わりたいと思った。
- ・こどもが興味を持ち、真剣に見てくれて嬉しかった。こどもが楽しんでくれるとこちらも楽しくなった。
- ・やってよかったなと思いました。またすごく反応が良かったので、いくつか用意するといいかなのと思った。
- ・何か一つ自信があるものがあると、こどもとの距離が縮まるし、間を持たすこともできた！
- ・子どもの興味を引き出す手段は他にないかを考えるようになった。
- ・簡単なものでもこども達が喜んでくれて嬉しかったです。保育する立場の人がいろんなことを教える（見せる）ことで子どもの中に様々なことに興味関心がもてるようになると思い、また実践したいと考えています。

(4) また、マジックを行わなかった 113 名に対しても、「マジックを実践しなかった理由」についてその理由を尋ねた。回答の一部を以下に示す。

- ・保育計画と合わなかった。
- ・乳児が担当で、やる機会がなかった。
- ・こどもの発達段階を考えると、伝わらないかと思った。
- ・部分実習がなく、やる機会がなかった。
- ・他に計画していたものがあつた。

- ・練習しても失敗したから、失敗すると思いやらなかった。
- ・難しいと思った。
- ・余裕がなかった。
- ・考えてなかった。
- ・隣のクラスの先生がマジックをやっていたので、自分ではできる気がしなかった。しかし、マジックはこどもの興味を引くことができるものだと思うので、今後の実習ではやってみたい。

5. 考察

(1) マジック実践を行った者の感触と効果について

報告数が少ないこともあり、結果の解釈は慎重に行わなければならないが、自由記述の結果から、保育実習でマジックを実践した者の多くは、こどもから「楽しい」「もう一回やってほしい」といった肯定的な反応を引き出せたことが示された。また、マジックを行うことによって、こども達との心理的距離が縮まり、こどもともっと関われるようになったり、あまり関われなかったこどもとの関わりが生まれやすくなるなどの効果が報告された。さらに、保育実習生自身の感触として、こどもが楽しんでくれたのでもっとやってあげたくなった、保育が楽しくなったといったポジティブな感触を抱いたことが示された。また、こども達が楽しむ様子を受けて、「他にこどもの興味を引き出す手段はないかを考えるようになった」という記述からは、保育実習生がこどもの立場に立って考え、よりよい保育を提供していこうとする保育者としての成長の萌芽、保育に対する自己効力感の高まりが読み取れる。

マジックを実践することによって、こども達は何らかの刺激を受け「好奇心」を発揮させて遊びを展開していったように思われる。友達との見せ合いっこや保育実習生の真似は、保育の原理である「様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと」¹⁵⁾を達成しているといえよう。

また、「もう一回！」や「寄ってくるこどもが倍になった」という報告からも、マジックがこどもと実習生を繋ぐ橋渡しの機能を担っていることが伺われる。さらに、こどもとの距離が縮まり、その後の関りにも良い効果が生じたことが読み取れる。特に、「あまり関われなかった子が向

こうから寄ってきてくれた。対話が増え、笑顔がよく見られるようになった」という報告からは、マジックが子どもとコミュニケーションを繋ぐ役割を果たしていることが伺われ、「安心できる保育士等との関係の下で、身近な大人や友達に関心を持ち、模倣して遊んだり、親しみを持って自ら関わろうとする」¹⁵⁾ 姿を達成しているといえる。

以上より、マジックは確かに子どもと保育者を繋ぐ共通した実践であるということができよう。カズ・カタヤマが指摘するように、表現芸術としてのマジックは死滅し、お手軽で、深みを探求しなくなる活動になっているのかもしれない。プロフェッショナルとしての、表現芸術を求めるマジックに関しては、カズ・カタヤマの指摘する点は非常に重く受け止めなくてはならないだろう。しかしながら、マジックが大衆化したことによって、子ども達が「不思議」に触れる機会は増え、その体験をもとに遊びを展開させたり、他児と関わったりできるようになったことは素直に喜ぶべきことであろう。

ハーラン・ターベル¹⁾は「マジックとは娯楽性を伴った芸術表現である」と述べている。マジックを演じる者の表現力次第で観客に演者の思いを伝えることができる。保育者であれば保育のねらいを意識した構成を行うことで、マジックが子どもに対して様々な思いや感動、好奇心を生み出すことができる実践の一つといえよう。本研究の結果からも、保育所保育指針で示されている保育の原理や人間関係の内容がマジックを通じて達成されたことは大きな成果といえる。

(2) マジック実践をしなかった者についての考察

多くの学生がマジックを実践しなかったと回答した。その理由としては「自身の保育実践と合わなかった」「対象が乳児でマジックをしても伝わらないと思った」「準備をする時間がなかった」「失敗するかもしれないと思った」「恥ずかしかった」などであった。また、記されてはいなかったが、マジックという実践が性に合わなかった学生もいただろう。それはそれで構わないと筆者は思っている。どのような方法であれ(保育としての品位が保たれれば)、子ども達を楽しませ、関わりを深めていく手段をもっていればよいと考えている。今回提示したマジックは、子どもと関わる上での一つの実践手段である。保育実習生が自らの保育実践を考え、他の素材を選択しても、結果として子どもと繋がり、関係を深められれば良いと考えている。

特徴的な記述として、「隣のクラスの先生がマジックをやっていたので、自分ではできる気がしなかった。しかし、マジックは子どもの興味を引くことができるものだと思

うので、今後の実習ではやってみたい」という記述は今後の保育者としての成長を期待できるものである。今回は実践できなかったが、自身の保育実践と子どもとの関係性を考えている様子が伺われるものであり、記述者がどのようにマジックを保育実践に活かしていこうとするのか、報告を待ちたいところである。

また、何人かの記述に「乳児が相手だった」「子どもの発達段階に合わなかった」という記述がみられた。富田が指摘するように、「不思議さ」を体験できるようになるのは年中ごろということもあり、不思議さを味わってもらう、というねらいでは子どもの発達段階とミスマッチを起こすこともあると考えられる。その場合は、「新聞紙ツリー」などのマジック的な要素も持っているが、どちらかという目と見た目が変化し、楽しめるようなネタを提案することも必要となると考えられる。

一方、いくつか記述がみられた「考えなかった」という点は、保育の質を考えていく上で問題であろう。このような姿勢は、マジックを実践するか否かといった次元ではなく、子どもとの関わりの深まりを自身の課題として考えていなかったとも読み取れる。マジックのレクチャーに限定せず、このような保育実習生に対して、いかに保育の魅力ややりがい、子どもとの関わりの楽しさを伝えていくことができるかを検討することが必要である。

6. まとめと今後の課題

改めて、保育の原理には「様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと」¹⁵⁾ がある。また、人間関係の内容として「安心できる保育士等との関係の下で、身近な大人や友達に関心を持ち、模倣して遊んだり、親しみを持って自ら関わろうとする」¹⁵⁾ ことが示されている。「はじめに」で述べたように、筆者のマジック公演の影響を受け、子ども達は「マジックごっこ」を遊びとして楽しみ、先生たちや友達に見せ合うという姿がみられた。これは、保育所保育指針にある「様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと」¹⁵⁾ に寄与したものと解釈することができよう。また、保育者である先生や他児に見せる、伝え合うといった行為には保育内容の人間関係の内容と関連した発達の姿が示されているといえよう。

では、保育実習生のマジック実践は子ども達にどのような影響をあたえたのだろうか。本研究の結果からは、成功失敗に関わらず、マジックを実践することで子どもの気持ち、子どもとの関わり、保育実習生の保育や子どもへの思

いが変化しうることが示唆された。特に、「こどもが楽しんでくれて嬉しかった」「こどもをもっと楽しませたい」という気持ちの生起は今後保育者となっていく上で重要な原体験となるだろう。しかし、保育やこどもに対する思いへの変化については、本研究では学生の自由記述を分析するに留まった。今後は、保育者効力感¹⁸⁾などの尺度を用いて、保育者の内面的変化やこどもとの関わりの姿勢の変化について実証的検討を重ねていくことが必要であろう。

さらに、本実践の課題点としては以下のことがあげられる。マジックはこどもと保育者・保育実習生を繋ぐ有効なコミュニケーションツールであるが、タネも仕掛けもあるマジックは習得して間もない保育実習生にとっては「失敗」という不安が付きまとう。授業でレクチャーできたのは2回という少ないコマであり、その後は学生の自学自習に委ねるしかなかったのが現状である。ネタの選定にはセルフワーキング的な物も含めて、なるべく技法を用いない、身近にあるものを使ったシンプルなネタを選定した。しかし、こども達に自信を持って見せるためには、どんなシンプルなトリックであっても相応の練習が必要である。保育実習指導という授業の枠組みでは、他の実習に関わる所連絡や指導を行わなくてはならないためマジック指導のみに時間を費やすことができない。そのため、学生は「タネは知ったが、できるまでには習熟できない」というジレンマを抱えることとなる。この点に関しては特別演習といった形で練習時間を確保するか、教本やDVDを作成し、学生の自学自習を促すことで一定の効果が得られるのではないかと考えられる。

筆者の究極的な理想としては、保育者が自身の保育実践を組み立てていく中で、マジックの原理を理解し、こどもの発達と照らし合わせ、こどもの感性や創造性、コミュニケーションを育むための一手段としてマジックを活用できるように保育者を育成することである。

しかしながら、保育者は保育の専門家であって、マジックの専門家でもプロのパフォーマーでもない。また、保育をやりたくて学んでいるのであって、マジックをしたくて学んでいるわけでは必ずしもない、というモチベーションの違いもあるだろう。そのため、先にあげた「理想」は保育をしていく上での弊害となる可能性も孕んでいる。保育とは、こどもの成長を支える実践的活動である。そのため、保育の場におけるマジックは他の児童文化財と同じく、「こども達を楽しませ、感性を刺激し、創造性を呼び起こし、他者とコミュニケーションを行うきっかけ」という保育を展開する一手段として活用されることで十分その機能を果たしているのではないかと考えられる。

ただ筆者としては、マジックが持つ可能性に保育者が目を向け、自らの保育実践に取り込むことでこどもの育ちにどのように効果的に役立てられるかを深めてもらいたいというのが願いである。

引用文献

- 1) ハーラン・ターベル：Tarbell course in MAGIC 第1巻（加藤秀夫訳）、テンヨー、p.44（1976）。
- 2) カズ・カタヤマ：カズ・カタヤマのシルクマジック大全、東京堂出版、p.1（2011）。
- 3) 河合 勝：河合勝のトーク&マジック、株式会社メイト（1998）。
- 4) 藤原邦恭：ワンランク上をめざす保育者のために かんたんマジック手品を100倍楽しむ本、いかだ社、pp.34-36, 52-55, 77-79（2004）。
- 5) 藤原邦恭：お誕生日会を変える！保育きらきらマジック、世界文化社（2013）。
- 6) 星野徹義：楽しくてもり上がる！保育のちょこっとマジック、ナツメ社（2013）。
- 7) 三宅邦夫・大竹和美ほか：先生も子どももできる楽しい手品遊び62、黎明書房（1996）。
- 8) M.M.C（松戸奇術会）監修：みんなあつまれ！手品の本、すずき出版（2003）。
- 9) 菅原英基：保育で使える！わくわくマジック、ひかりのくに株式会社、（2011）。
- 10) 阿部 恵編著：ハッピー保育 books4 出し物たっぷりネタ帳、ひかりのくに株式会社（2009）。
- 11) 阿部 恵編著：ハッピー保育 books18 出し物たっぷりネタ帳2、ひかりのくに株式会社（2012）。
- 12) ひかりのくに編集部：カンタン！すぐできる！アイディアたっぷり出し物BOOK、ひかりのくに株式会社（2016）。
- 13) 富田昌平：幼児期における不思議を楽しむ心の発達——手品に対する反応の分析から——、発達心理学研究、20（1）、pp.86-95（2009）。
- 14) 糸 静子：保育実践におけるマジックの活用、日本保育学会大会研究論文集47、pp.440-441（1994）。
- 15) 厚生労働省編：保育所保育指針解説書、フレーベル館、p.21, 73（2008）。
- 16) 藤原邦恭：紙1枚であなたもマジシャン おり紙マジックワンダーランド、いかだ社、pp.26-27（2000）。
- 17) 二川滋夫：奇術入門シリーズ テーブルマジック、東京堂出版、pp.6-8（1993）。
- 18) 三木知子・桜井茂男：保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響、教育心理学研究46（2）、pp.203-211（1998）。